

第1回男女別学教育シンポジウム

基調講演

なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか

2010年8月10日

私学会館(アルカディア市ヶ谷)

日本男女別学教育研究会

中井俊巳

はじめまして。別学研究会の中井俊巳です。まず私自身と別学教育との関わりをご紹介します。

私の生まれた鳥取県に別学校は一枚もありません。共学の公立小・中・高校を卒業。大学は長崎大学教育学部。ですから、小学校から大学まで、ずっと共学です。私自身、共学にさして不満をもったことはありません。

別学校と関わるようになったのは、長崎市に新しくできた精道学園に大学卒業後、縁があって勤めるようになってからです。精道学園は初め、1978年に長崎市にできた学校で共学校として小学1年生を募集し、3年後の81年に男女別学校になりました。私が勤めていた学校は、男子校です。いまは高校まであり、高校2年生までの生徒がいます。そのすぐ近くに中学までの女子校があります。いずれも一学年一クラス少人数の非常に小さな学校です。

私はこの学園で23年間、小学生や中学生を教えていましたが、毎日のように学級通信を書いているうちに書くことが好きになり、2005年から作家に転職しました。書いてきた本は、40冊くらいありますが、そのほとんどはエッセーです。

この度、『なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか』という自分でも不慣れな論文調の本を書いたのか、と聞いてみると、最初の動機は、私が勤めていた学園に少しでも助けになればと願ったからです。世の中が共学志向になるなかで、普通の親御さんに読んでいただき、男女別学教育の理解をしていただけるような本を書こうと考えたのです。

それで昨年6月を皮切りに、様々な学校の訪問や合同説明会での取材をしていきました。

はじめは、書けるかどうか、わかりませんでした。書いても出版してもらえない可能性は低いと思っていました。が、多くの方のご協力によって、おかげさまで、7月終わりにようやく出版することができました。

皆様、本当にありがとうございます。

さて、この1年間以上、取材や研究を進めていくうちに、別学の良さがこれまで以上にわかるようになりました。そして、一部の学校のためだけでなく、日本全体のためにも別学という教育システムを残し、発展させなければならないという思いにだんだんと変わっていきました。そういう思いが、このシンポジウムへとつながっていったのです。

なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか 本講演の内容

はじめに・・・ 日本の男女別学校は危機にある

I 男子と女子は違う

II 男女別学の利点

III 学力面での効果が高い男女別学

おわりに・・・ 男女別学校を守り発展させよう

最初に、本講演の内容についてざっとご紹介しておきます。

はじめに・・・ 日本の男女別学校は危機にある

I 男子と女子は違う

II 男女別学の利点

III 学力面での効果が高い男女別学

おわりに・・・ 男女別学校を守り発展させよう

私は、本の中では「男女別学教育が効果が高い」ことを書きました。

この基調講演で特に申し上げたいことは、「男女別学教育を守り、発展させましょう」ということです。

時間は、わずかしかないので、以下、拙著「なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか」を要約した簡単な説明になります。

日本の男女別学校は危機にある

	男子中	男子高	女子中	女子高	共学中	共学高
平成11年	117	187	249	429	250	675
平成21年	92	119	215	304	400	881
増加率(%)	78.6	63.6	86.3	70.9	160	131.5

「全国私立中学高等学校名簿」(日本私立中学高等学校連合会)より

理由…共学出身である親の増加？少子化、長引く不況？
 入学者増をねらったの経営戦略？
 しかし…別学教育自体は、教育効果が高い
 昨今、欧米諸国でもその見直しが図られている

では、日本の男女別学校は危機にある、ということをはじめに見ておきたいと思います。

これは「全国私立中学高等学校名簿」の平成11年版と平成21年版を比較して作った表です。

ご覧のとおり、ここ10年で、男子校も女子校は減少、共学校は増加しています。

その理由は、共学出身である親の増加、少子化、長引く不況による一部の私学の経営悪化。それに応じて、男女別学校が共学化することで、入学者増をねらったの経営戦略などが考えられます。

しかし、各校の建学の精神が失われるとすれば、それは大変残念なことだと考えます。しかも、別学教育自体は、教育効果が高く、昨今、欧米諸国でもその見直しが図られているのですから。

I-1 男子と女子は違う

脳科学の研究により生まれつき 男女の脳に違いがあると判明

- 女子は言語能力が高い
- 男子は空間認知能力が高い
- 聞こえ方の違い
- 見え方の違い
- 記憶の仕方の違い
- 感情の処理の違い

では、「なぜ男女別学の教育効果が高い」のでしょうか。

それは、**男女の特性、違いに応じて教育できる**からです。

その効果を確認する前に、まず、男女には基本的に違いがある、ということから見ていきましょう。

あとでも申し上げますが、いまアメリカでは、学力向上と生徒が学ぶ選択肢を拡大するために、公立校での男女別学クラスが増えています。それまでは、公立校においては男女の教育機会均等に反するものは禁止されていたのですが、2002年に作られた法律「落ちこぼれの子をつくらないための初等中等教育法」(No Child Left Behind Act : 一般にNCLB法という)によって、男女の違いに応じた教育ができるようになったからです。

その大きな要因の一つとなったのは、**最近の脳科学の研究によって、男女の脳とその働きが生まれつき違うことがわかってきた**ことです。二十世紀には、男女の態度、好み、行動の違いというものは社会がつくりだすというのが主流の考え方でした。しかし、脳科学の発達によって、必ずしもそれだけではなく、脳の神経経路の働きやホルモンによることがわかってきたのです。

男女の脳の働き違いはあるということは、いまや脳科学者の意見は一致しています。

たとえば、いろいろな実験や研究から次のようなことがわかっています。(ここでは項目だけあげます)

女子は言語能力が高い

男子は空間認知能力が高い

聞こえ方の違い

見え方の違い

記憶の仕方の違い

感情の処理の違い

I-2 男子と女子は違う 他にもさまざまな違いが・・・

- 読書の違い(興味関心の違い)
- 成熟のスピードの違い
- 行動の違い
- 学習態度の違い
- 友情のあり方の違い
- 教師との関係のあり方の違い
- PISA調査による性差(得意科目の違い)

他にもさまざまな違いがあります。(ここでも、項目だけあげます)

読書の違い(興味関心の違い)

成熟のスピードの違い

行動の違い

学習態度の違い

友情のあり方の違い

教師との関係のあり方の違い

では、PISA調査による性差(得意科目の違い)については、具体的に数字でみてみましょう。

I-3 男子と女子は違う PISA調査における得点の男女差

		2000年	2003年	2006年
読解力	OECD平均	▲32点	▲34点	▲38点
	日本	▲30点	▲22点	▲31点
数学的R	OECD平均	11点	11点	11点
	日本	8点	8点	20点
科学的R	OECD平均	0点	6点	2点
	日本	▲7点	4点	3点

- ▲は女子が高い
- 読解力は女子が高く、数学的Rは男子が高い。

『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査(PISA)』より

一般に男子は算数・数学が得意で、女子は国語を得意とする傾向があります。これはPISA調査によると、統計の上、確認されていることです。

PISA (Programme for Interanatyonal Student Assessment) 調査とは、「OECD(経済協力開発機構)生徒の学習到達度調査」のこと。

参加国が協同して15歳児を対象として、2000年、2003年、2006年、3年ごとに学習到達度問題を実施しました。それぞれ読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーを調査したものです。

その結果は、全参加国の平均がほぼ500点になるように計算されています。

2006年の結果によると、読解力では、すべての国で、女子が男子の方が女子を上回っています。

OECD加盟国の平均は、男子473点、女子511点で、38点ほど女子が高くなっています。

日本は男子483点、女子513点で、31点ほど女子が高くなっています。

一方、数学的リテラシーでは、男子の方が女子より高いのは35カ国で、女子の方が男子より高いのはカタールの1カ国です。

OECD加盟国の平均は、男子503点、女子492点で、11点ほど男子が高くなっています。

日本は男子533点、女子513点で、20点ほど男子が高くなっています。

ちなみに科学的リテラシーの分野で、OECD加盟国の平均点は男子が501点に対し女子が499点です。

日本は男子533点、女子530点とあり、読解力や数学的リテラシーほどの差はありません。

Ⅱ 男女別学の利点

1. 男女の特性(違い)に応じた教育
2. 異性の目を気にしないで、のびのびできる
3. 男女ともに主役になれる
4. 教師のサポート・模範(ロールモデル)
5. 結果的に学力が向上する

男女に違いがあることをわかっていただいた上で、
では、男女別学の利点を5つに分けてみていきたいと思います。

1. 男女の特性(違い)に応じた教育
2. 異性の目を気にしないで、のびのびできる
3. 男女ともに主役になれる
4. 教師のサポート・模範(ロールモデル)
5. 結果的に学力が向上する

II-1-1 男女の特性に応じた教育

男女の特性(違い)に応じることで、教育の方法・効果が違ってくる

教育方法の一例

- 男子は競争が好き、女子は協力が得意
- 男子には命令口調で大きな声、女子には穏やかに小さな声
- 男女それぞれが興味関心を示す教材の活用・開発

では、まず「男女の特性に応じた教育」についてみていきましょう。

学校教育は、基本的に集団教育です。ひとり一人を大切にするとどの学校でも目標としますが、子どもは30人前後のクラスの中で教育を受けます。

そのクラスは、日本の義務教育では、小学1年生から中学3年生まで年齢によって区切られています。そして、学年ごとに、同じ教科書の内容を教えられ、同じテストを受けて、評価を与えられます。

このように集団で教育をする場合、集団を構成する生徒たちはなるべく同質であると効果をあげやすくなります。

これまで述べてきたように、男女では脳やホルモンの働き方の違いが、見え方、聞こえ方、発達段階、人との関わり方、感情の表し方、同じ刺激に対する反応の仕方など、あらゆる分野に及びます。

男女別学なら、教室、あるいは全校で一斉に指導するときも、男子、女子のこのような特性を踏まえてよりきめ細かな指導することができます。

男女の特性(違い)に応じることで、教育の方法・効果が違ってきます。

たとえば、教育方法のほんの一例ですが、

男子は競争が好き、女子は協力が得意なので、それに応じた授業展開を工夫することができます。

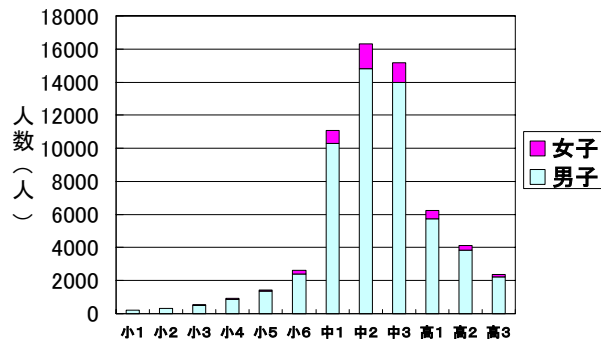
男子には命令口調で大きな声、女子には穏やかに小さな声で、教師の声や指示の出し方も違ってきます。

男女それぞれが興味関心を示す教材の活用・開発を工夫することができます。

などがあげられます。

Ⅱ-1-2 男女の特性に応じた教育 生活指導のあり方も違ってくる

学年別・男女別加害児童生徒数



文部科学省「平成20年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』2009年11月30日」

「男女の特性に応じた教育」は、生活指導のあり方にも関わります。

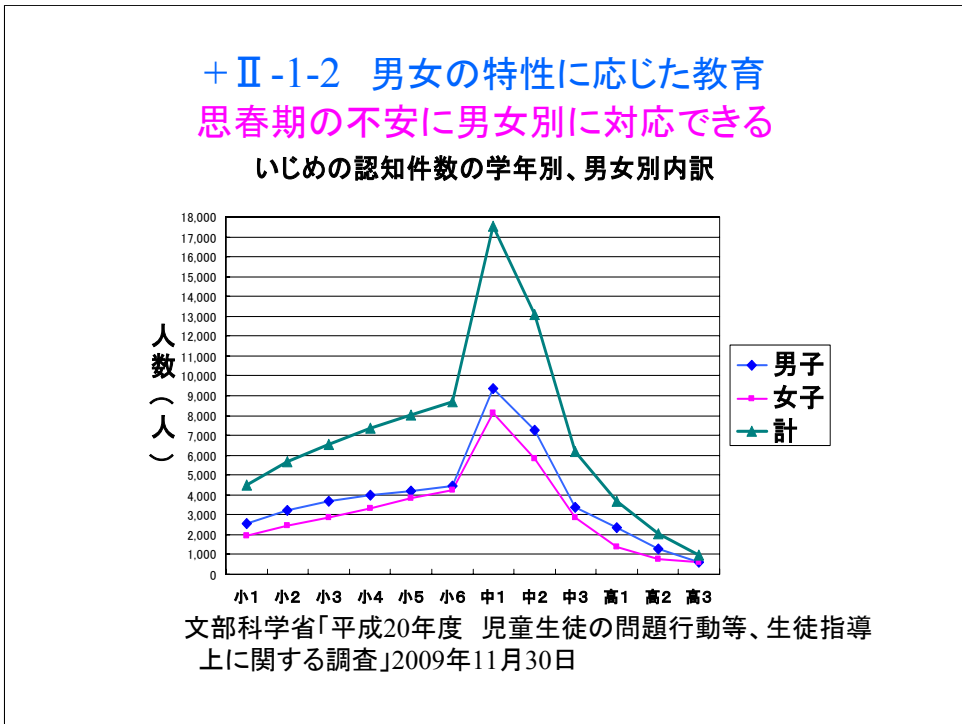
では、文部科学省「平成20年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』の「学年別・男女別加害児童生徒数」をご覧ください。

このグラフを見ると、加害児童には男子が女子より非常に多いことが見てとれます。しかも中学2・3年生の心が不安的な時期に多い。

思春期のストレスや精神的ないらだちを男子は攻撃的・暴力的な行為で表すことが多いのですが、女子はそうではありません。

別の形、たとえば自傷行為や摂食障害など複雑な形で表面化するとある研究者は言います。

であれば、男子と女子との対応の仕方は違ってくるはずですし、生活指導のあり方を男女で変えた方が問題を解決するために有効となってきます。



次に「いじめの認知件数の学年別、男女別内訳」をみてみましょう。

確認されたいじめの発生件数を学年別にみると、男女とも中学一年時が圧倒的に多くなっています。

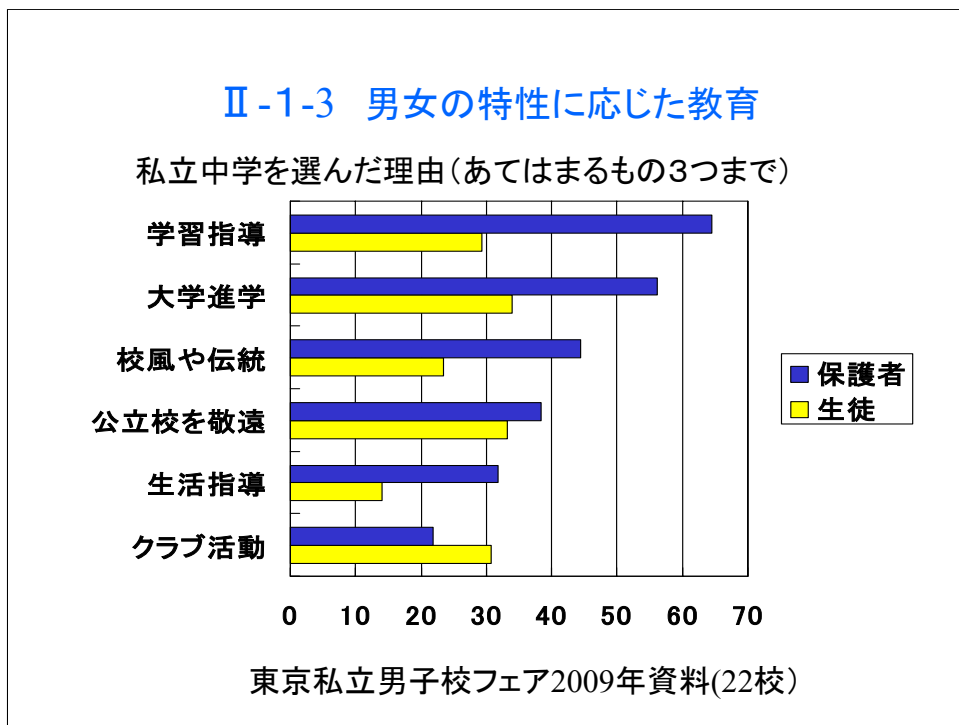
中学一年生にいじめの発生件数が多いのは小学校から中学校に変わって、新しい学習生活環境や人間関係に子どもたちが不安を覚えるからかもしれません。

この中学一年生時の子どもたちは、誰かも不安と期待をもち、よいスタートができるかどうかは大切です。

男子のいじめは暴力が主流なので目につきやすいのですが、言葉や無視、最近はネットやケータイを使った女子のいじめは見えにくいので、教師はよほど注意していても把握しにくいことがあります。

「中学一年の入学時の不安で最も多いのは、男子が中一から始まる新しい勉強ですが、女子は新しい学校で仲間ができるかどうかです。だから女子の不安を解消するケアが必要となってきます」

そのため女子の特性を理解し、男女それぞれの不安に対応した教育が必要になってきます。



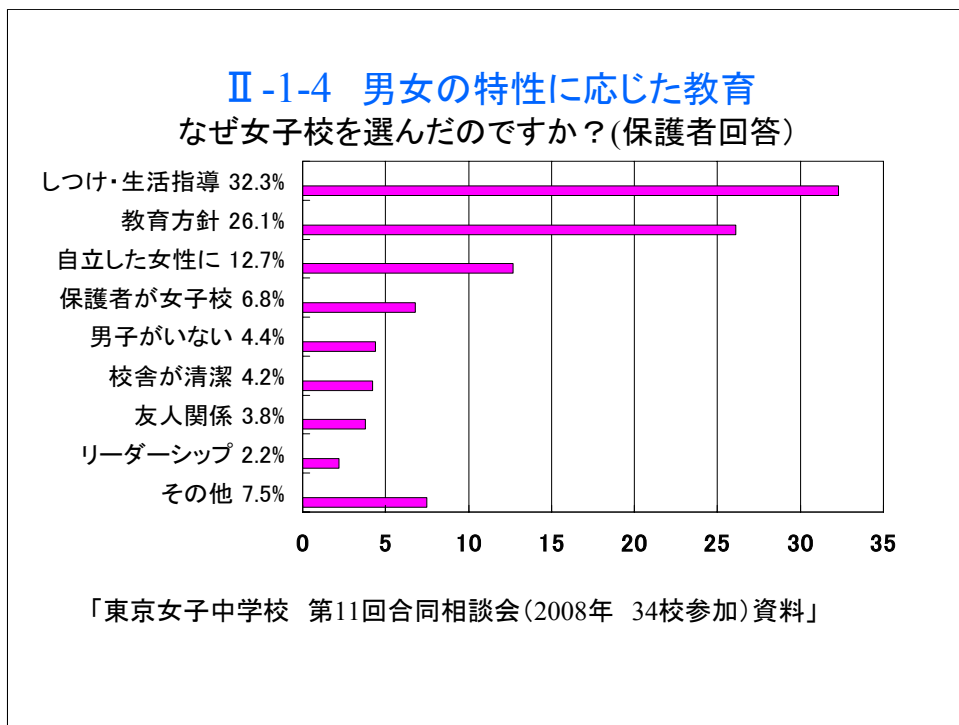
生徒と保護者が中学受験で男子校を選ぶのはなぜでしょうか。

それがわかる1つのデータとして、東京私立男子中学校フェアに参加している22校の生徒とその保護者を対象にした意識調査をご紹介します。(「東京私立男子中学校フェア2009」資料 生徒とその保護者10000人を対照にした意識調査結果)

これを見ると、私立中学を選んだ理由としては、学習指導が充実していることや(中高一貫による)高い大学進学実績があることなどが多くなっています。

特に子どもよりも、親が強く望んでいることが見て取れます。

男子校では、このような親や生徒に要望に応じて、学習指導や進学指導に力を入れているところが多いのです。



では、次に女子校が選ばれる理由をみていきましょう。

「東京女子中学校 第11回合同相談会」(2008年 34校参加)の資料によると、「女子校はしつけ・生活指導をしっかりとってくれる」がトップです。

確かに、女子校では、しつけや生活指導に力を入れています。

男子といっしょですと男子にあわせがちな指導も、女子に特化しているので、きめ細やかで、女子の繊細な心理を考慮した上でおこなえるメリットがあります。

また、女子校では、茶道、華道などを授業に割り当てて、日本伝統的な文化とともに礼儀作法を学ばせている学校が多くあります。

和服の着付けを学び、浴衣の制作をし、その浴衣を着て、体育祭に舞踊を披露するのが伝統となっている学校もあります。

日本女性は、その慎ましきや品格ゆえに「やまとなでしこ」と称えられてきました。

女性らしい細やかな優しさや思いやりがあり、忍耐する強さも持っていました。

女子校では、そんな日本女性の特質を子どもたちに自覚させ、思いやりと品格のある凛とした女性を育てているように思います。

Ⅱ-1-6 男女の特性に応じた教育 異なる成長ペースに対応できる

- 小学生男子は身体的にも精神的も女子より成長のペースが遅い
- 男子が伸びるのは中学生以降

小学生の男子は、同学年の女子と比べると身体の成長が遅くなります。たとえば、小学一年生の子どもと比べると、おおむね女子の方がしっかりしています。年齢で言えば、一歳か二歳、女子の方が成長は早いのです。

女子はおおむね集中力があり、聞く力、話す力の言語能力が高く、そして真面目です。

男子は落ち着きがなく、じっと椅子に腰掛けたり、人の話を聞いたりするのも苦手です。

女子と比べて幼い印象を与えますし、本人も女子に対して劣等感をもつことがあります。

そんな男子が伸びるのは、中学生以降だというのが私の印象です。

もちろん個人差はありますが、中学生女子の成長のペースがゆっくりになっていく時期、男子は急速に伸びていく子が多いものです。

別学校では、そんな男女の心身の成長ペースに細やかに対応できるという利点があります。

II-2-1 異性の目を気にしないで、のびのびできる のびのびと過ごせる環境

「男子校を優先」した人(全体の66.7%)の理由 (複数回答)

	保護者	生徒
男子だけによる、のびのびと過ごせる環境	66.8%	63.1%
男子だけによる、深い交流と人間関係	54.8	42.8
男子だけによる、学業に専念しやすい環境	39.0	24.0
男子の中での競争や活動による能力の開発	28.4	20.8
男子としての役割理解と人格形成	20.9	8.4
共学校に比べて規律だった生活環境	13.7	5.7
魅力的な公立校がなかった	5.1	5.9

東京私立男子校フェア2009年資料(22校)

男女別学校の教師や保護者などに聞き取り調査をおこなってきたのですが、その良さは、異性の目を気にしないで、のびのび学習に集中できるということを受け手が非常に多くいました。

この表は、「東京私立男子中学校フェア2009」の意識調査結果で、「男子校を優先」と答えた人(全体の66.7%)の理由を一覧にしたものです。

これを見ると保護者も生徒も学業(学習指導や大学進学)だけを考えて男子校を優先的に選択したのではないことがわかります。

トップは、「男子だけによる、のびのびと過ごせる環境」です。

男子生徒も保護者も、男子だけの方が伸び伸びできることを知っています。

男子が自分の個性や能力をいかんなく発揮し伸ばしていくためには、厳しい規律はあっても、比較のおおらかな環境に身をおいた方が効果的です。

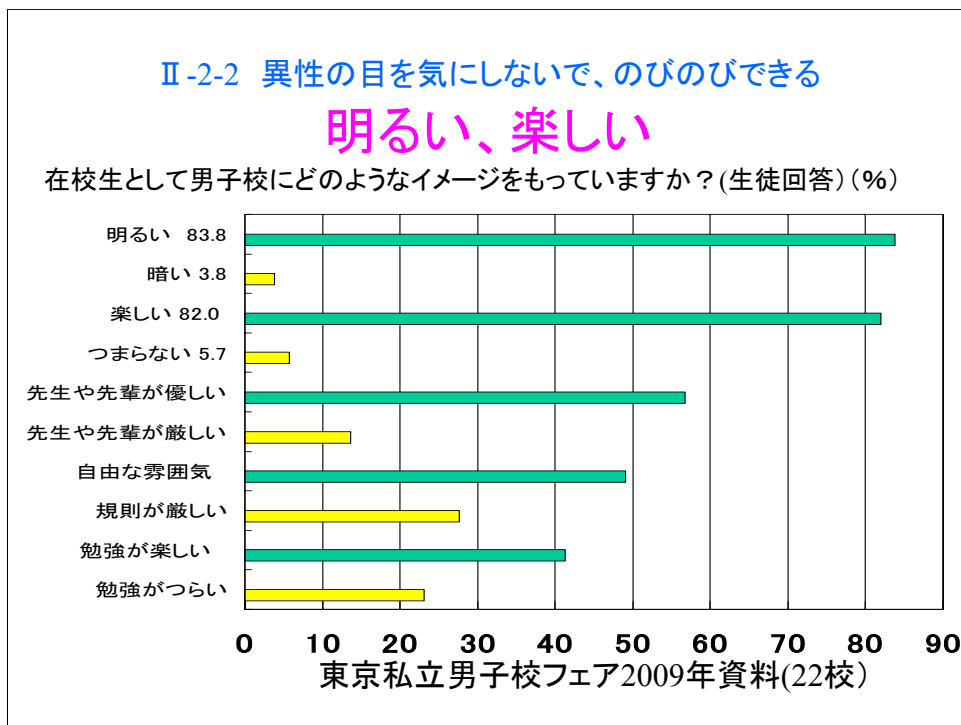
小学生まで、こと細かに厳しく生活指導をされてきた男子のなかには、学校や教室環境に溶け込めなくて窮屈な思いをしてきた子がいるはずですが、優秀な女子から、「だらしのないわね」「ちゃんとしてよ」などと注意を受けてきた子もいるでしょう。

思春期の男子は、しだいに母親にそっぽを向いてしまうように、口やかましい(と本人は思っていない)女子には閉口してしまいます。いっしょにいとストレスが溜まります。

でも、男どうしでは、細かいことで、お互いに口やかましくなることはまずありません。

また、もし間違っていることがあれば、信頼できる同性の男子教師や先輩からビシッと一言、言われるだけで男子生徒は聞き入れます。

そういう環境の方が、特に思春期の男子には伸び伸びとできて楽しいのです。



この資料を見ると、83.8%の子が男子校は明るいと答え、82%の子が楽しいと答えています。

なぜ男子校が明るくて楽しいかというと、男子だけで気楽、伸び伸びできるからです。これは女子校も同じだと思います。女子校も生徒たちがのびのびして明るくと思います。女子も男子も異性の目を気にしないため、より自分らしさを発揮できるからです。

ところで、男子は明るく、楽しく、自由な雰囲気の中にも、筋の通ったしっかりしたものを彼らは求めています。それは、ある種の厳しさです。

スポーツでも強くなるためには、楽しいだけでなく、厳しい練習に耐えていかななくてはならないことを彼らは知っています。

人間してたくましく成長していくためにも、自由のなかにあつて自分を律する厳しさを身につけなくてはならないこともわかっています。

ですから、自分が間違っていれば、普段は優しくても、親身になって厳しく指導してくれる先生や先輩を思春期の男子は求めます。

「先生や先輩が厳しい」と答えている子が13.6%、「規則が厳しい」と答えている子が27.6%いますが、それでも現在の学校生活が「つまらない」答えている子がわずかなのは興味深いことです。

厳しさの中にも、楽しさや充実感を味わっている子がいるということではないでしょうか。男子教育のスペシャリストである教師陣は、男子の特性を心得えて指導にあたります。ときには優しく、ときには厳しく、たくましい男子を育てようとしています。

II-2-3 異性の目を気にしないで、のびのびできる のびのびと学習

- ・異性の目を気にしないでいい
- ・安心感（心の安全地帯）
- ・失敗を気にしないで質問や発表
- ・女子校では理科実験でも、女子が主役

また男女別学校の良さとしてあげられるのは、異性の目を気にしすぎて萎縮することなく、自分らしさを発揮しやすい環境にいられるということです。

生活の場に異性がいるのは自然ですが、男子も女子もそれぞれ、自分をよりよく見せたいという意識がどうしても出てきます。それは悪いことではないと思います。

そういう気持ちが、活動の発奮材料になることもあるでしょう。

が、異性からどう見られているかが気になって、容姿や髪型などの外観に必要以上にこだわり、劣等感や優越感の間を揺れ動きやすいのが、この思春期の子どもたちです。

悪く思われたくない、嫌われたくないという意識が働き、消極的になることも女子に多いのです。

本来、外観よりもむしろ知性や心という目に見えにくい人間性を磨き育てていく時期においては、それはたいへん残念なことです。

その点、男女別学校では、異性の目を過度に気にしなくてよい環境に身をおけます。

そのことは、子どもたちが本来、なすべき学習をする上では適しているのです。

男女別の授業を受けている多くの生徒は、授業について分からないことを手を上げて聞くことに対して抵抗が少ないようです。

彼らは異性を意識することによる恥ずかしさや異性から馬鹿にされるかもしれないという不安がないからです。

ヒラリー・クリントンは、高校までは共学でしたが、ウェルズリー女子大学に入り、男女別学の良さを知るに至りました。彼女は自伝の中で女子校の良さについてこう述べています。

「男子学生がいないということで心理的な空間が広がり、月曜から金曜午後までは、外見を気にしなくていい安全地帯ができた。勉強に集中して気が散らず、授業に出て行く時も自分の容姿など気にならなかった。」(ヒラリー・ロダム・クリントン著『リビング・ヒストリー』早川書房)

子どもたちにとって自分らしく伸び伸びとした環境で生活できることは大切です。そのような環境では、学習にも集中でき、自分の能力を発揮しやすいのです。

たとえば、女子校では、理科実験でも男子任せにしないで、女子が主役で積極的に取り組みます。

それによって女子の理系分野の能力をより育成していくことにつながっていきます。

Ⅱ-3 男女ともに主役になれる

- 男子校・・・やりたくない事を女子任せにできない
- 女子校・・・リーダーシップがとれる



・幅広く能力を開発できる可能性がある

男女が共にいる場ですと、もちろん男女平等ではあるのですが、反面、これは男子、これは女子と暗黙のうち役割分担が決まったり、あるいは両者が互いに譲ったり押し付けたりしがちになります。

たとえば、掃除もそうです。最近、掃除をすることが人格面の発達にもよいと評価されている反面、「掃除などの家事は女がするべし」という偏見をもっている男性もいます。その点、男子校では雑事を女子まかせにすることがなくなるという良い点があります。掃除などは真面目な女子にやらせて、男子はさぼるということが私の中学・高校時代にはありましたが、男子だけの学校なら、掃除は自分たちでやらなくてははいけません。そして、男子だけでやらせると結構、彼らは真面目にやるものです。

また、女子校ではリーダー的役割を男子に頼ることも譲ることもなくなります

女子校では、体育祭や文化祭などの生徒が主体となって取り組む行事のときに、よくあるように、男子がリーダーで女子が補佐という図式はありません。

いつも女子がリーダーを務めます。女子がリーダーとなって企画・運営していく力が養えるのです。女子だけの行事と言っても、大いに盛り上がります。

このように男女ともに活動の可能性が広がり、それぞれがより幅広く能力を開発できるようになります。

II-4 教師のサポート・模範

- 男子校には男性教師が多く、
女子校には女性教師が多い。
- ↓
- 男女両方の教師は必要であり、有効。
- ただ同性の教師はサポートしやすい。
- 模範(ロールモデル)にもなりやすい。

男子校には男の教師が多く、女子校には女子の教師が比較的多い傾向があります。このように、なぜ男子校には男の教師が多く、女子校には女子の教師が多くなるのでしょうか。それには、むしろ教育上の理由があるからです。

思春期にいる男子に、女性教師が指導するのはやや難しい面があります。思春期にいる男子は、おおむね母親をうっとうしく思い、距離を置こうとします。女性教師に対してもそうです。生活態度で細かいことを逐一注意されたり、勉強のことで口うるさく要求されたりするのをなかなか素直に受け入れることができません。しかし、自分より年上で権威を認める男性教師から指示されたことには素直に従うことができます。一般に男子は、権威ある存在から指示された方がよく動けるのです。しかし、男性教師が男子校に多くなるのはこのような理由です。

一方、女子にも異性に対する傾向があります。思春期の女子は、小学生のときと違って、父親との距離を置くようになります。男子教師に対してもそうです。男子教師が馴れ馴れしく接したり、上からガミガミ言われたりするのを女子は望まないでしょう。ことにデリケートな思いを無視されたり、一刀両断に切り捨てたりする発言にはムツとくる傾向があるそうです。男性教師も女子に対しては、男子とは違う接し方を心がけなければなりません。少なくとも男子にするように、ポンと肩をたたいて激励すれば、セクハラに取られるかもしれません。その点、男性教師よりも、母親か姉のような女性教師の方がずっと接しやすく話しやすくなるようです。女子の場合、何かと相談したいことは多いようで、学習や進路などは別にしても、体や性のこととなると、女性でないとわかりません。女性教師はその点、自分も思春期の悩みを通過してきたので、女子のちょっとした心身の変化にも気づきやすいし、同じ立場に立って相談に乗りやすいのです。もちろん男性教師にも女子に素晴らしい指導をされる方はいらっしゃいますし、女性教師にも男子に素晴らしい指導をされる方はいらっしゃいます。子どもの教育には父性と母性の両方が必要で、異性の教師に指導されるほうが、逆に功を奏する場合も多々あるでしょう。けれども、以上のような同性ならではの利点もあるわけです。

さらに、ロールモデル(お手本・模範)に日々接する機会が多いというのも別学校の利点です。男子校では、父親や兄のような存在をもちやすく、彼らの能力を伸ばす大きな要因になることは先に述べました。女子校でも、同じようなことがいえます。女子校は女子教員が多いだけでなく、女性が校長や教頭など重要な地位に就いている学校が多くあります。そういう世界では、一般社会ではなかなか実現しにくい男女共同参画社会のモデルを生徒たちはイメージしやすくなります。そして、女子は自分が将来、社会で働く具体的なイメージを、目指す職種は違っても、身近な女性教師の中に見出しやすいのです。こうしたことは、彼女たちが夢や目標をもって学習していく上での意欲づけともなり、支えともなりうると私は考えています。

Ⅲ-1 学力面での効果が高い男女別学 男女別学校(高校)は、全体の1割もない

日本の高等学校数

	国立	公立	私立	計	割合
男女ともにいる	14	3772	891	4677	90.2%
男子のみ	1	23	120	144	2.8%
女子のみ	1	51	302	354	6.8%
生徒が不在			8	8	0.2%
計	16	3846	1321	5183	

文部科学省『平成21年度学校基本調査報告書』より

以上述べてきたように男女別学では、男女それぞれの特性に応じて、それぞれの良さを伸ばせる環境であり、教育システムをとっています。

これらの利点が総合的に作用して、結果的に、男女別学校では学力がより伸びます。では、次の学力向上の効果が高いことについて国内外の例をあげてご説明します。

現在、日本では、男女別学校はごく少数です。下の表のように高校の男女別学校は、全体の1割(男子校に至っては2.8%)にも満たしません。

Ⅲ-2 学力面での効果が高い男女別学

2010年出身校別東大合格者数トップ10

全体の1割に満たない別学校がトップ校の9割を占める

★開成高校	168人	
★灘高校	103人	
★筑波大附属駒場高校	98人	
★麻布高校	86人	
●桜蔭高校	67人	
★聖光学院高校	65人	
★駒場東邦高校	61人	
★栄光学園高校	57人	
東京学芸大附属高校	54人	
★海城高校	49人	★男子校 ●女子校

(『サンデー毎日』2010年4月18日号参照)

これを見ると、ベスト10の9割は、男女別学校です。

男女別学校が、東大合格者のベスト10の学校に、仮に3、4校入っていたとしても、男女別学校の進学面での優位性は明確です。

なにしろ男女別学校は、全体ではわずか1割にも満たないのでから。

ところが現実には、1割に満たない男女別学校が東大合格校ランキングの上位9割を占めているのです。

ちなみに、全国に東大合格者10人以上の学校は、77校ありますが、そのうち約4割の30校が男女別学校です。

進学状況のわかりやすい資料なので学校別東大合格者数をあげましたが、これは、あくまでも目安の一つに過ぎません。

学校によっては、東大よりも他の国立大の医学部を志願する生徒の多い学校もあるでしょう。また地元の大学や早慶上智などの私立学校を目指す生徒も多いでしょう。ただ、それでもやはり男女別学校に進学トップ校が多いのが現状です。

しかし、男女別学校が学力だけを伸ばすと私は考えていません。

男女の特性に応じて教育することで、その人間性も伸ばしていきます。

仮にもし礼儀マナーでのトップ10を選ぶとしたら、女子校が連なるのではないかと私は考えています。

Ⅲ-3 学力面での効果が高い男女別学 イギリスでも6%の男女別学校がトップ

- GCSE(義務教育修了レベル)

トップ10の90%が別学校

男子校4校 女子校5校 共学校1校

トップ50の80%が別学校

男子校15校 女子校25校 共学校10校

- AS/A2 Level(高校修了レベル)

トップ10の90%が別学校

男子校3校 女子校6校 共学校1校

トップ50の86%が別学校

男子校14校 女子校29校 共学校7校

Times Online 2010年3月24日

イギリスの教育制度は日本とは違って複雑なのですが、この国でも男女別学校は生徒に高い学力をつけています。

イギリスでは、義務教育は5歳から16歳までで、基本的には、16歳でGCSEという全国统一試験を受けます。また希望者は17歳でGCE-AS Levelという全国统一試験、18歳でGCE-A2 Levelを受けるというシステムがあり、公立、私立どちらの学校に通う生徒にも共通しています。

GCSE試験は「義務教育の修了」を意味し、通常16歳で受験します。14歳からGCSEに向けた2年間のカリキュラムに沿って勉強します。結果はAからアルファベット順にABCDEFGUという成績順にグレード付けされます。

Aが一番よいのですが、Aの上にはA*(Aスター)というグレードがあります。UはUndraged(グレードなし)です。その結果は、学校の順位ごとに新聞や雑誌で発表されます。

それによると公立、私立を問わず、トップ10校では、男女別学校が90%(男子校4校 女子校5校 共学校1校)となっています。トップ50校では、男女別学校が80%(男子校15校 女子校25校 共学校10校)です。

AS/A2 Levelの試験は一般的に「A Level」の名前で呼ばれていて、日本でいう「高等学校」レベルの教育修了資格にあたります。基本的にAS/A2 Levelは大学入学のために必須の試験であり、生徒は自分の希望する学部の入学条件を念頭にAS/A2 Levelの科目選択を行ないます。

カリキュラムの1年目が修了した時点でAS Levelの試験を受け、その成績によってA2 Levelのカリキュラムに進むことが出来ます。結果はA(最高)からE(パス)までアルファベット順にグレード付けされます。

次は、「Times」に発表された2009年の結果のうち、トップ10をあげたものです。

これによるとトップ10校はすべて私立ですが、男女別学校が90%(男子校3校 女子校6校 共学校1校)となっています。

トップ50校では、男女別学校が86%(男子校14校 女子校29校 共学校7校)です。

ちなみにイギリスの高校は、日本同様、男女別学校はわずかしかありません。

イギリスの高校は、約5000校、公立校は約3700校ですが公立校のほとんどは共学です。

その残り約1300校が私立学校になるのですが、男女別学校はその中でも少数です。

私立学校団体independent Schools Council(ISC)によると、私立高校のうち、アンケートに答えた1265校の約10%が男子校(126校)で13%が女子校(164校)だとされています。私立の男女別学校はあわせて300校もないのです。イギリスの男女別学校は、約5000校のわずか6%ほどになります。

つまりイギリスでも男女別学校はわずかでありながら、義務教育レベル修了でも、大学入試レベルでも、いずれも学力トップ校のほとんどを占めているのです。

Ⅲ-4 学力面での効果が高い男女別学

アメリカで男女別学クラスが急増

2002年、学力向上と学ぶ選択枝の拡大のため、NCLB法
(落ちこぼれをつくらないための初等中等教育法)
1994年には4校→現在540校以上
男女双方に成果あり

成功している(公立)男女別学校
卒業率60%のNYの貧しい地域にできた女子中高(100%の卒業)
貧しいアフリカ系の男子・女子のための小・中学校

アメリカ合衆国で男女別クラスが認められるようになったのは、2002年5月に成立した NCLB (No Child Left Behind Act) 法によります。(「落ちこぼれの子をつくらないための初等中等教育法」)

1972年に制定された法律では、過去に女子が十分に教育を受けられなかった男女差別の歴史を反省し、公立学校において男女の教育の機会均等に反するものは一切禁止されていました。

しかし、最近になって男女の違いを意識することが子どもたちの学力を伸ばすことになるかもしれないという考えが出てきたのです。

そこで、前述の新しい法律が制定。両親と学校に対し、共学か別学かを選択できる幅広い柔軟性を認められるようになったのです。

学校ではプログラム、授業計画、カリキュラム、方法、教員、設備などについて、男女で同じレベルのものが提供されるのであれば、男女別クラスという形態をとっても良いことになりました。

1994年には全米で公立校でわずか4校だけだったのですが、現在では540校以上の公立校が男女別学クラスを取り入れ、現在も増え続けています。

その成果もステットソン大学などの研究により実証されつつあります。

この法律ができるに先立って、大成功を収めている男女別学校は、ニューヨークでも貧しい地域イースト・ハーレムに、1996年に開校した公立女子学校The Young Women's Leadership schoolです。

ニューヨークの高校の卒業率が平均60%に満たないのに対し、この学校は卒業率100%でニューヨークのトップ校となりました。70%は貧しい生活をしている家庭の子どもでもあり、希望者は全員入学できるのにもかかわらず、ここ2年間、この学校は最終学年での全生徒が大学に進学するという驚くべき結果を出しています。

私がこの学校を訪問して驚いたのは、11階建てのビルにあり、日本の公立学校のように恵まれた学校環境ではなかったことです。グラウンドもなく、体育館も教室も小さかったです。

しかし、この学校の生徒は貧困から抜け出すために、大学に入って学位をとり、将来の自分の夢や目標を叶えたいという明確な意志をもっていました。

その手助けをするために、最も学習効果が上がり、生活面でも安心な女子だけの中学高校を創設者は創ったのです。

この成功例により、アメリカでも新しい公立女子学校が次々とできています。

Ⅲ-5 学力面での効果が高い男女別学

- 韓国でも男女別学校が好成績

2009年に初めて、高校別に大学修学能力試験の結果を公表
(言語・数理・外国語の三科目)

男子校(345校)・・・平均305.3点
女子校(292校)・・・平均303.4点
共学校(579校)・・・平均291.4点

どの地域でも別学校が好成績
トップ100校のうち69校が別学校

- 共学校1999年43.9%→2008年56.1%と増加
が、この共学化を疑問視する声が強まる。

韓国は、卒業した大学で、就職先の給与待遇が変わるといわれるほど、日本以上の学歴社会です。

そのため韓国での受験熱は日本以上で、学力向上における国民の関心は非常に高いものがあります。

2009年に初めて高校別に大学修学能力試験(修能試験 = 日本の大学入試センター試験に相当する)の成績が公表されました。

その結果、男子校や女子校は共学校よりも好成績であることが明らかになりました。「朝鮮日報」(オンライン)では、次のように報じています。

「本紙が人文系高校1217校(受験者が30人以下の高校を除く)の3科目(言語・数理・外国語)の点数を分析した結果、男女共学に通う生徒の平均点は男子校、女子校より12点から14点低かった。男子校(345校)の生徒一人当たりの平均点は305.3点、同じく女子校(292校)は平均303.4点で、男女共学(579校)の生徒の平均291.4点を大きく上回った」

「地域別に比較してみても、16の市・道すべてにおいて男女共学の成績の方が男子校、女子校よりも低かった。(中略)人文系高校の3科目合計点数における上位100校(浪人生含む)にも、男女共学は31校しか入っていない」(以上「朝鮮日報」2009年11月08日)

ちなみに、韓国の一般高校の男女別学の比率は、1999年の56.1%から2008年は43.%へと増加してきました。

しかし、ここにきて共学化を疑問視する声があがっています。

男女別学校を守り発展させよう

- 別学教育という可能性を守ろう
子どもたちの可能性のためにも・・・
- 別学教育の良さを伝えよう
教師が、研究者が、記者が、親が・・・
- 別学教育をさらに発展させよう
日本の未来のためにも・・・

最後になりましたが、今日、私が申し上げたかったことを繰り返します。
それは、「男女別学教育を守り発展させよう」ということです。

共学を否定するわけではないのですが、子どもたちが別学教育で学べる可能性を私たちは残さなければならないと思います。
これは、子どもたちの能力育成と幸せの可能性を広げることだと思います。

そのためには、私たちが別学教育の良さを伝えていくことができればと思います。
各自、それぞれのお立場で、ご自分のできる範囲で・・・

そして、守るだけでなく、より発展させていきましょう。
それは日本の教育をより良くすることにつながります。
そして、日本の教育をより良くすることは、日本の未来に素晴らしい展望を拓くことにつながると思うのです。

以上は、拙著『なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか』(学研新書)を短く要約したものです。最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。